

上述の事項を統一して考察すれば明川統は明白に二の階に區分するを得る。即ち坪六階咸鎮階とし、渭南砂岩より上位の地層を後者に一括する。坪六階は其だけが短少な沈積輪廻をなし、咸鎮階は完全に大きな輪廻を示し、沿岸帯に始まり泥帶の状態に達したる後に、海退の傾向を記録して淡水沼地性の中部萬戸砂岩を経て陸成の上部萬戸砂岩に終る整然たる有様は他に比較さるべきものが少い。

明川統の貝類化石は目下記載中で遠からぬ將來に報告する事が出来ると思ふ。

支那文化の發達地に就て

藤 田 元 春

一

支那史の教科書を見ると太古の初、漢族は西北方より、黃河流域に沿ひ、漸く中國の内地に入り、先住民である所の苗族を追ふて漢民族の文化を開いたとくのが例であるが、これは有名なラクベリー氏の *Western origin of the Early Chinese Civilization* の所説に従へるものであつて、必しも當を得たものと見ることは出来ない、氏は支那に百姓 *Pak Sing* といふ語があるが、これは種族

名である、百は數を表示するものではない、百姓とは漢族が來つて土民を征服するや、彼等土民に對して、自己を稱した名稱である。この語は實に史書に出でたる漢族の最初の名稱で、百姓とは黃帝の部下を意味し、黃帝に従つて西北より來り先づ甘肅の西南隅に居を定めたもので、バク族とも見るべき民族であるが、この民族はもとバビロニアに住し後に東方に移住したものだと言いた。同時に西部アジアにはバクトラ、バクタン、バクチャリ、バクダット、バギスタン等の地名が多い。故に黃帝は支那土着の統治者ではない、バク族の首長であると述べた。又黃帝を有熊氏(Yu-Hsing)といふが、熊の音^ユであるから、バビロニア王ナンクンテと同一の人である、即熊^{ナクシヤイ}黃帝であるとの曲説まで敢てした。しかし熊は動物の「クマ」であり熊は狀態の「タイ」であつて全く違つた字である、有熊氏といふは河南新鄆の地名に基くものであつて、斷じて狀態の熊ではない。百姓といふのも多くの庶民を數の上から見た語であつて、支那民族に於ける諸姓の總稱であるから、黃帝及其一族の特稱だとするのは、全くラクペリー氏の誤である。リヒトホーヘン氏も支那の民族の起原は、新疆の和闐のオアシスだとのべて、ラクペリー氏とは別に支那文化の西北起原説を立てたけれども、リヒトホーヘンの論據は紀元五、六世の魏書に「自高昌以西諸國人等深目高鼻、唯此一國(和闐)貌不甚胡類華夏とあるのをみて恐らく太古に支那人の源流が一時こゝに居たとのべたのであるが、これもヘデインやスタインの發掘及び研究によるとホタン及びタクラマカン沙漠の埋没せる都市は、文化は全く印度系であつて、支那とは異類の文化發達地であつた。或は當時ホタンに西藏族がゐたので華夏に類すと見たかもしれないけれども、たゞこの一文から、漢民族の起原をホタン

附近に求めるのは危険である。勿論支那文化の上代に於て玉器が重んぜられたが、その玉の原石は多くこの附近から出る、故に支那民族が一時こゝに滞在してゐた時に、玉器を用ひる習慣を得て東移の後もこの地の玉を重んじたのであるだらう、即ち和闐附近が支那族の一時的滞在地であらうといふ説も立てられぬことはないであらう、しかし支那の傳説ではどうしても和闐まで周以前の源流を持つてゆくことが不可能である。

ヒルト氏の「支那古代」に於ては、このラクベリー氏やリヒトホーヘンの所説を確證がないといつてゐるが、恐らくそれが穩健な考ではないであらうか。しかるに何ぞ知らん多くの支那學者はこのラクベリー氏ののべた西北起原説を採用して、桑原隲藏先生の中東洋史にも

「漢族は蓋し、極めて悠遠なる時代に於て、西北方より次第に支那の内地に移住し來りしものなり、彼等は少くとも五千餘年前の古代に於て、已に黃河沿岸の地に繁殖して幾多の部落をなし、各酋長を戴きしが、年月を経るに従ひ其部民の最多く、其領土の最廣くして、最威勢ある酋長は次第に其近傍幾多の小部落を併吞し若くは服従して、漸く共同の主權者を生ずるに至れり」

とのべてあつて、支那人は西北高原から移つたものだと言かれてゐる。沈武進氏の中國歴史講義なるものも開卷第一に右の桑原博士の文をそのまま漢譯してゐるのであるから、漢民族西北起原説は日本の學者まづこれを唱へて、支那の學者後にこれに従つたとみるべきであるらしい。

しかし那珂博士の支那通史をみると「漢人は自ら稱して華人と曰ふ、支那を創開せるは此の人種なり、初は北嶺の北に居り、夙に文化を河濱に敷く」とのべてあつて、極めて茫漠とした地域をあげてゐられるが西北高原から來たとは論じてない筆者はこの那珂博士の説が正しいと思ふ。蓋し支

那人即ち漢民なるものは勿論西北から來たのもあるであらうが、東からも、南からもやつてきて、河濱即ち中原に居住し然る後數千年の昔に著しき文化民族となつたものでその何れから來たものが最後まで優秀であつたとは容易に云へないと思ふ。殊に西北高原から來たものは、寧ろ遊牧の野蠻人である。現在に於ても西北高原は行國の民で牧畜の生活に依存するものが多いやうに、古代に於ても文化は低かつた、たとへ武勇はすぐれてゐても野蠻であつた、中原に於て、これら西北の高原族たる戎狄の侵入をうけたのは、夙に農耕の術を發明し、城廓の民であつた多くの先住民であつて、それは苗ではない。主として後の世に東夷とさげしまれた民族の方が、却つて西來の戎狄よりも文化民族であつたと考へられるので徒らに文化の西北起原は説くべきでないと思はれる一人である。しかし中村久四郎氏の中等東洋史でも漢人種は支那固有の種族にあらず、蓋し今より五千年許り前に中亞地方より支那の西北方に來り、遂に黃河に沿ふて東下し次第に其地を占領し、當時既に江河の間に居住せる苗人等を東征南伐して、まづ北支那に建國するに至れりとのべ、高桑駒吉氏の參考東洋大歴史にも、今を距ること大凡四千餘年前亞細亞の中央に起りし民族あり、其生活の目的と地理の方便によりて、四方に分散して其欲する所に移住せしがとのべて（創世紀にかいてある昔話ととりいれ或はハンチントンなどの論説によられたのであらう）其一部東方に移り黃河の河流に沿うて下り遂に所謂漢人種となれるがごとしと論じ次に支那文化の創設は全く此漢人種に存せりと雖も、所謂東夷西戎北狄南蠻の異族常に中國を睨うて内地に入り頗る人種の混淆を來せりと記し中央アジアから出發した民族は水の中の油のやうに黃河畔に移つたが、その後には西戎や北狄が後を躡んでき

たやうにのべられてゐるので、全く西洋の神話を丸呑にしてこれを漢人にくつゝけた趣がある。或はさうかもしれないが、かやうに説明すれば漢民族は孤立してしまつて、然る後西北高原の民族とは全く無關係になる恐れがあるであらう。

轉じて林泰輔氏の「支那上代の研究」をみると「支那上代の石器玉器より見たる漢民族」といふ論文があつて、石器は後世に至るまで東夷や肅慎氏が用ひたことをしるし、國語、魯語の下及晋書東夷傳を引いて、其産地の東にあることをのべ、素問註にある東方之域では病を治するに「砭石」を用ふことを援引して、唐時猶東方は石針を用ひしものゝ如しとのべ、淮南子にも説山の章に病者寢席醫之用針石とあるから、その使用の廣かつたことから、東夷の石器の非常に早く發達したことをのべ、玉器については、その産地は崑崙で陝西や貴州西方の産であるけれども、山海經では天下至る所に玉を産したとある位である、東方必しも玉の産出がないとは云へないが、或は和闐あたりから出たのであらう、しかし玉を愛重するのは、主として周代より後であつて、石器ほど古いものではない、一に玉といつても今の世の和闐から出る玉とちがつて、最初は非常に種類が多く、璚、璫、璵、璆、玳、珉、碧、珉等をはじめ石の玉に似たるものにも琅や玕、其他無數であるから玉を一種とのみ見ることは出来ない、石器時代の石の棍棒頭が、周代の璧や琮と同一系統である所からみても、古い石器時代の文化が、周以後の玉器に代はつたとみられる。

「従つて或一部の論者の説の如く、支那の文明は、西方の或地方より移植せしものにあらざして、支那の地に於て漢民族の開きたるものと爲さざるを得ず」

と確言されてゐる、蓋し林氏の説は那珂氏の説と同様であつて、黄河河畔に四千年以前に住んでゐた民族が漢人の文化を作つたものである、それが西北のみからきたものだといふのは疑はしい、西北からみれば東からも南からもやつてきて混然としてこゝに黄河畔に支那の上代文化が出来たといはれるのである、従つて桑原博士や中村氏や高桑氏の云はれる所必しも定説ではないが、これらの説は中等教科書として行はるゝこと既に數十年（桑原博士の中等東洋史は明治三十一年發行）にも及んでゐて、或は東洋史の定説となつてゐるかの觀があるので、こゝにその誤解されやすき點を正さうとしたのが、この小論文の目的である。

一一

中國歴史講義をみると

伏羲生於成紀（甘肅）而都於陳（河南、淮陽）遷於曲阜。黃帝生於軒轅之邱（河南新鄉）而方行天下、終邑於涿鹿之阿（察哈爾）。
今考其地：皆當黄河流域、其跡自西而東。少昊都曲阜（山東）顓頊都帝邱（東郡濮陽）帝嚳都亳（河南歸德府）堯都平陽（山西）舜都蒲坂（山西）其地後漸移而西。

とある。右の括弧の中の今の地名からみても明なやうに、或は伏羲は實に西から東に移つたといふが、これも傳説で明でない。しかしその後の帝王はいづれも漸を追ふて東から西に移るのである。太古西北高原に蚩尤といふ蠻族がゐたから、黃帝の遠征となり、後に堯や舜も、都を山西へ移したと見える。けれども他の傳説では堯や舜いづれも山西の人ではない。孟子に舜は諸馮に生れ、負夏

に遷り、鳴條に卒す、東夷之人也とあるし、司馬遷は、昔堯作遊成陽（山東、定陶縣）舜漁於雷澤（山東雷夏澤）湯止于臺（河南歸德府）とのべた。又曰く

昔唐虞（堯都河東（山東）殷人都河内（殷墟）周人都河南（洛陽）。夫三河在天下之中。若鼎足。

であつて、支那文化の發祥地は主として黃河下流の平原である、堯や舜が右の傳説の如く平陽や蒲坂に移つたとすれば、恐らく東夷の人が西北高原の蠻族を威壓すること恰も黃帝が涿鹿の野に進んだと同巧異曲であつて、そこには獯鬻、玁狁（匈奴）などいふ文化の低い牧畜民が居たのである。そこで黃河下流に夙に入つて農耕文化を建設してゐた東夷の人々は西北の高原民族を敵視したので、かやうな傳説を作つたと見ねばならない。高桑氏の云はるゝやうに夙に、西北から移住した漢民が農耕文化をたて、やがて西北の匈奴に苦しましめられたのだといふ説にすれば、それはあまりに人種東流の地理的事狀を無視することになると考へられるがどうであらうか。

三皇五帝の傳説から考へると堯舜は少くとも東夷の人であつた。然るに司馬遷は、

自黃帝至堯舜、皆同姓、而異其國號、以章明德。

とのべてゐる。舜もし果して東夷の人であるならば、三皇五帝すべて東夷の出身とみて差支がない。しかし司馬遷の云ふ通り、學者多く五帝を稱するけれども確證はない。天下を周遊して至る所の長老が、各々別個に黃帝堯舜の居所だといふのを見もし聞もしたが、多くは古文に離れないのを書いておくといふ程度であるから、我々はこれを史實だと見ることは出來がたいと考へるけれども、少くとも有史以前の三皇五帝は多くこれ東夷に近いとするのが、支那の傳説であつて、西北から出て

來たといふのは稀なやうである。故に文献通考にも、山東郡縣多古帝王、神明建都之墟、春秋以前見經傳。とのべてあるのである。そこでヒルト氏も支那人種の起原説に於ては、支那民族の起原はわからないとのべたのである。ある種の傳説では西北部甘肅陝西の二省からだといふが、それも確實でない。支那人自らの記述によれば、彼等の祖先は太初から現在の黃河畔の平原にゐたと見るのであると喝破した。

三

しかし周代まで下ると、たとへ傳説だとしても明に西戎の力によつて、即ち野蠻な西北高原の戎軍によつて、東の方殷を亡したのであつた、故に尙書泰誓に、武王が河朔に宿つて、軍衆に誓ふて曰く嗚呼西土有衆。咸聽朕言と叫んで、陝西より西の戎羌に激勵の辭を與へた、ついで牧誓をみると。

王曰、嗟我友邦冢君、御事司徒、司馬司空(中略)、及庸、蜀、羌、髳、微、盧、潁人、稱爾戈比爾干、立爾矛、予其誓。
ハシ

と呼んでゐる。即ち、で友邦とのべたのは、元は殷の封建の諸侯であるが、後の庸以下の八國はすべて蠻夷であつて、庸濮は江漢の南、羌は西蜀、髳微は巴蜀、盧彭は西北高原の國であつた。つまり今日の四川と陝西の高原民族で、周に臣事した戎族である。周は實にこれらの高地民族の武力を以て殷を亡ぼしたのみでなく、周人それ自身が陝西の牧畜民であつた。これは漢代になつても同様

で、司馬遷は西紀第一世紀に於て天水、隴西、北地、上郡すべて關中と同俗で、畜牧天下の饒たりとのべた位だから、それよりも一千年以前の陝西は當然牧畜の國であり、多くの騎馬の士を集めて、東三河の中に出で、河内の殷を亡したのである。故にこの史實から漢民は西北高原より黃河下流に移つたと見てもよいけれども、その時既に東方には立派な殷の文化があつて、到底粗野な西北民族の及ぶ所ではなかつた。だから武王は殷を亡ぼし紂を斬つても、直ちに其都を取ることは出来ないで、紂の子武庚をして殷都を治めしめ王弟管叔、蔡叔、商叔といふ三監を以てその政治を助けたのみではなく、殷の皇族箕子を聘し、鎬京（長安）に伴ひかへり、禮を卑うして洪範といふ一書を授かり、又殷の民を長安に移したのである。獨り長安に移したのみでなく、自分の兄弟王子を王室の藩屏として諸侯に封じた際にも、殷民をその封地の首都に分けた。例令ば周公を魯に封するや殷民の六族、條氏、徐氏、蕭氏、索氏、長勺氏、尾勺氏を招いて之に仕へしめ、康叔を晋に封するや殷民の七族、陶氏、施氏、繁氏、鑄氏、樊氏、饑氏、終葵氏を招いて之に仕へしめた。蓋し殷の高等な文化民族が移らないでは、魯や晋の國都になり得なかつたのである。そこでこの周よりも文化の高かつた東方の人々は、どこまでも周に叛くことになつたので、周以後から之を貶稱して東夷といふのである。武王崩ずるや、三監は武庚を助けて亂を作すに當り、淮夷徐夷奄夷の屬皆周に叛いたといはれる。蓋し魯に分たれた徐氏と同じく徐夷は今の江蘇省徐州が本據であり、淮夷は山東の南方の沂州あたりに居たものであり、奄夷は實に山東の曲阜に近くゐたものであつて、この東夷の反亂は周初の大難であつた。周公且の力よく之を平定して事なきを得たけれども、徐夷のごときは、

容易に之に服従しなかつた。

支那の人は東夷、北狄、西戎、南蠻といふ熟語をつくり、中原の周圍の民をすべて野蠻視するのみでなく、以夷制夷など、得意がつてはゐるが、この夷といふのは決して野蠻といふ文字ではない、許慎の説文にも夷は平也、以大從弓、東方の人、也とあつて、大は古篆では人の形であるから、夷とは弓人の象形文字である、弓術に長じた民族といふことであつて、周代の玉器以前に石鏃を用ひた時代に、山東の人々は特に其術にすぐれてゐたらしい。故に國語には孔子陳にあつたとき、隼が楷矢に貫かれ、石鏃の長さ尺有咫にも達した武器を見たことがあるが、孔氏は之を肅慎氏の矢也と答へてゐる。恐らく泰山山地の中にさうした弓人即ち夷がゐたものであつたであらう。故に之を東夷といつたが、その最初の意味は東方の人、弓にすぐれた人といふ意味であつて貶稱ではなかつた。所謂徐夷の如きは、周代を通じて其武力をあとさず、宣王の時は、徐に偃王と稱する人がゐて、容易に周に従はなかつた。博物志をみると偃王は中々の名君であつたから、江淮諸侯皆伏従して之に従ふもの三十六國に達したとある。そこで周王は使を楚に遣はして之を伐たしめたところ、偃王は仁君で其民を害するに忍びず、敗れて彭城（徐州）武原縣東山下に逃げたところ、百姓之をさいて從ふもの、萬數に達し、遂にその山を徐山といつた。王がなくなつた後山上に石室をたて、之を祀つたので民人の祈禱するものたえず、今に見存するとしるされてゐる。晋の張華がこの徐山の事を當時に見たとすれば、西紀前八百年の徐王の祠が、晋武帝の頃二百八十年代まで、凡そ一千年も永續したことになる、これによつても徐夷といふものゝ勢力がわかるのである。

四

周代に於て東方の徐夷や淮夷の反亂があつた以前に殷よりも古い國だと傳説される所の夏について古傳説をさぐつてみると、夏禹も亦舜と同姓で東夷の國である、換言すれば支那文化の發祥傳説に於ては周以前に東夷といふものが餘程有力であることが昭々として明である。然らば東夷はどこから來たか楷矢石磐とか或は石針とかいふことで先秦の人々に注目されたこの民族は、どこから來たかと云はれると我等は何とも答へられない。けれども地理學的にみて黃河の平原の如き廣大な原野を開拓することは、最初から考へられない。それよりも海岸線の出入の多い良港に富んだ國土に於て、古い時代に北の方から、又は南の方から、原人が往來した山東省の如き土地の海岸に、恐らくは最初の文化が光つて、それがやがて山東山塊の北、西、又は南に移つて、夏となり殷となり、農耕大に盛んになつて、然る後に西戎の襲來を招き、周の文化が大成したものである。従つて周以前に支那の文化は山東にあつたといふことは、文献通考に、古帝王の都の跡や神明の墟が山東に集中してゐるといふ説によつて首肯されてもよいやうである、日本でも大和の文化に先行して、出雲や九州の文化があつた、海外では希臘や伊太利に文化が發した、従つて古代の海上交通が支那の文化に於ける曙光で無かつたとはいはれないと考へるのは、筆者一人のみではないであらう。

五

そこで古代の支那の傳説を拾つてみると、第一に氣のつくことは夏の歴史である、周の初世に於て、東方の人々、殷や徐の人々の機嫌をとるといふことは既述した武王の政治にも現はれてゐるが、東夷が有力に活動したことは武王の帷幄の臣であつた太公望呂尙が東夷であつたことによつても明である。列仙傳には呂尙は冀州(汲縣)の人で遼東に遊ぶこと三十年それから南山に遷つたとあるが呂氏春秋は明快に呂尙は東夷之士とのべ、史記にも之を東海上の人だとある。そこで東方の事情や歴史に精通した呂尙は、王にすゝめて、古代の帝王の後を封ぜしめて人心の收攬につとめたとみえ、神農の後を焦(陝西省)に封じ、黃帝の後を祝(山東、長清縣、祝阿)に帝堯の後を薊(河北省北平)に、帝舜の後を陳(河南省淮陽、いかにも舜は東夷である)に、大禹の後を杞(山東、安邱)に封じたとあるのである。

舜は東夷であるが、禹も亦東夷ではないか、山東の安邱にあつた杞國が果して禹の後であるとすればこの國は春秋に於ては實に夷として取り扱はれた國であつたのである。全く關係のないところゝ禹の後を封じるといふわけはなかつたとすれば、一應この杞國について説明しなくてはならぬ。杞については春秋の經に隱公四年春王二月莒人(莒は山東諸城縣、膠州灣に近い)伐杞(山東安邱縣、莒の隣)取牟婁と出てゐるし、僖公二十三年の條にも冬十有一月杞子卒とあるのを左傳に批判して、十一月杞公卒す書して子といふは杞夷すれば也と述べてある位で、同じ二十七年杞の桓公來朝に當つても夷禮を用ひたから經に杞子來朝と貶したとある。つまり孔子在世の頃杞は夷であつて中國の禮に従はなかつた、しかもそれが大禹の後であるのだ。

ところが從來夏禹の後を封じた杞は陳留の雍丘で河南省の杞縣だといふことになつてゐるが、それでは嵩といふ山東から攻められない、故に王夫子は

杜解杞本都陳留雍丘縣、桓六年淳于公亡國、杞似并之遷都淳于、乃以地理攷證經文、雍丘去淳于且千里、淳于即亡、杞安能越鄭、宋、魯、齊而遠并之、遷舍其故國而爲千里之遷乎。下略

と述べた位で、漢書にも禹之後東樓公を杞國に封じたとあるが、これも河南でなくて、最初から山東の夏邱縣であつたのではないか、牟婁について杜預の註に城陽諸縣之東北に婁亭ありとあり、後漢書の平昌國にも婁亭が記されて、山東諸城縣東北に當る。雍丘の杞縣は春秋には宋鄭二國の爭奪地で斷じて杞ではない。所が史記の皇甫謐の註では、禹は平陽（山西臨汾縣）に都す、或は安邑（山西）にあり、或は曰く普陽（山西太原）であつて、いづれも山西である、所が一方有夏之居に徐廣が註して、夏居河南初在陽城（山西）後居陽翟（河南禹縣）とあつて、上代既に定説がなかつたらしい。司馬遷の云ふ通り到る所の人が、何れも禹の居だといふたからであらう。故に勿論禹が安邑にゐたといふことも確ではない。周は洛邑に都したといひ王城を邑とのべたが、その以前は王都は多く墟又は丘である。商は南丘に都し後殷墟に移るといふの類であるから、夏の安邑も實は安丘でなかつたか？、もし安丘だとすれば、杞國の安邱縣にあるのが當然となるのではないか。

方輿紀要には、安丘縣淳干城あるをしるし、酈道元の言をひき

「本夏時斟灌國、周武王以封淳干公、中略、後爲杞人所有、亦謂之杞城、襄二十九年晉人城杞之淳干、是也」と述べてゐる。

勿論周以前の史談は傳説で、大禹の治水のごとき果して實際であつたか否やは明でないが、大禹の大功績は黃河の氾濫を救ふたといふ事であつたとすれば、その活動地は山東の北部、河と漯と濟の横流した平野である、その安丘から出で、之を治めたといふことは、地理的に正しいやうにも考へられるのである。禹は黃河のみでない、支那の江も河も諸水もすべて治めたのだといへばそれには何とも答へられないが、まづ黃河の導水を第一の功だとすれば、その被害地は山東と河南と河北との間の平野である、恐らくは今の河間の地即ち九河から青滄二縣をへて、山東の德州無隸の平原こそ大禹導水の本場であつたに違ひない。大禹がこれを治めて、其子孫杞に封せられたと見て大過はないと思はれる。

六

山東の杞國は大禹の後でありながら久しく夷禮に終始した、蓋し夏は夷人であつたからであらう。その夷人であつた他の一證は、夷人即ち弓の名人を支那では羿ダイといふが、この羿といふ人は有窮の后であつて、山東省の德州に居たのである。大羿の孫太康の後國衰ふるや、夏の王、相を追ふて國政をとつたものが實にこの弓人の大家たる羿であつた。所が其臣寒促國を専らにして羿は殺され、羿の室と促との間に澆と豷が生れた、當時夏の柱石であつた國は斟灌氏（山東壽光縣）と斟尋氏（山東濰縣）であつたがこの二國は、山東の東泰山（沂山）から流るゝ濰水下流平地にあつた國で、かの安丘はその上流紋河の流域盆地に位し、斟灌は其下流左岸彌河の平地で、青州に近く、斟尋は濰水

に臨む所の濰縣に近い今は山東烟草の中心市場となつてゐる工業の要地である、元の山東運河もこゝを通つた位の要衝である。さうした土地に夏の有力な部族がゐたので、促は澆をしてこの兩國を滅ぼさしたといふから夏の政治舞臺は支那といつても、實は山東北部の平地に止まつた。やがて夏の君主、相の妃に少康が生れ、河南歸德府に逃れて、夏の遺臣を收め、灌尋二國の燼を集めて遂に促を滅し、轉じて澆を山東萊州の西北にある過に征め亡し、遂に天下を復興したといはれる。萊州といへばやはり禹貢に萊夷牧となりと記されてゐる東夷の地であつて、その臨接地の登州即山東海角は嶋夷の地である。さうしてこれらの夷人は、北は渤海々岸にも分布したので、禹貢冀州には島夷の名さへ見える。かやうな次第で夏の時代に活潑な働きをしたものは、すべて夷人であつたらしい。春秋襄公六年十一月萊は齊に亡されたとあるが、僖公十三年にも淮夷杞を病ましむといふ語があつて、古への夏の土地は、いつの程にか島夷萊夷淮夷杞夷になつてゐる。恐らくこれは國初からの夷であつたのではないか。しかしてこれらの夷の本家たる夏は夷だからといつて段々退歩したわけではない。帝孔甲の頃になると好方鬼神事とあつて、支那の民間宗教たる道教が、既に夏の時代に起りはじめたことを教えてゐるのである。

七

古代文化に於て注目すべきものは、その祭祀に關する風習であるが、史記には夏の孔甲が最初に鬼神の事を好んだといふが、一面に於て山東では古く泰山を中心の一つの信仰があつたことを記さ

ねばならない、さうしてこの泰山の信仰は、今日も猶支那の民心を支配する所のものであつて、博物志には泰山一曰「天孫」とある。

言爲「天帝孫」也。主召「人魂魄」。東方萬物始成。知「人」生命之長短。

であつて支那の五岳崇拜の中でも泰山はその首山である。故に史記にも昔は黃帝東海に至り、岱宗に登るといひ、天子ともなれば禮義として、泰山で封禪をするといふことが習慣であつたといふ位である。蓋し山東は東夷だといつても、その中で有力な人が出て、君主になる、即ち天子となれば、泰山に登らねばならなかつた。故にその封禪を行つた人は、三皇五帝位に止まらず、管子の言によると、古より泰山に封じ梁父に禪するもの七十二家であるとさへ記されてゐる。帝王の興廢は一に泰山崇拜と比例するのであるが、夏を過ぎて次の殷代には巫咸といふ賢臣がゐた。巫術をとるものが政治上の重臣であつた時代、即我國の祭政一致の時代ともみるべき時代であつたから巫祝の勢力はすばらしかつた。故にかの洪範をみると天地陰陽五行の説が記されてあり五事、八政、五紀を教へ、天子は民の父母であり、以て天下の王であるから、其政をとるや、曆數に従ひ、三徳を守り、卜筮の人を建立すべきであるといふことが説かれてあつて、殷代巫祝の有力であつた名殘を教へてゐるのである。所がさうした傳説や民間信仰は、支那では實に泰山を中心として山東に旺盛であつた。そこで漢書地理志にも齊では、長女はすべて巫兒となり、家主祠と爲り、婚嫁しないといふ民間の俗風を特書した位である。太史公も齊を以て大國となし、山海を帶び、膏壤千里、其民闢達だとのべたが、爾雅には殷齊は中也と記され、山東の國を齊といふのは臍の義で、支那の中であると

いふてゐる。所が齊の宣王の頃にもなると、立派に道教が成立したので、齊の民間信仰であり、殷の巫祝の流れを汲むだ所のものが、遂に支那の宗教にまで發展したのである。故に秦の始皇は二十八年東の方を巡視し鄒嶧に上り、泰山に封禪して石を立て、更らに東萊では成山を究め、芝罘に上り、南して山東琅邪に至り臺を興し、石に刻し、秦徳を頌したとある。蓋し封禪書によると、始皇の東巡は、山に上り石を立つるが目的でない。主として名山大川及八神を禮したもので、山東には古くから八神があつた、これ實に筆者の云ふ所の民間信仰である。齊人は太公望の作す所といふてゐるが、恐らくは夏以來のことであらう。山東の八神祠とは、一に天主祠、臨淄(齊の都)の南郊にあり、二に地主祠といふのが太山の麓の梁父にあつた、この祭場をマツリノミヤ時といつたとある。三に兵主祠といふのが蚩尤を祀つて山東の東平陸監郷にあり、四に陰主祠といふが三山(海上?)に、五に陽主祠が芝罘に、六に月主祠が之萊山(東萊)に、七に日主祠が成山(山東海角)に、八に四時主祠が琅邪にあつたので、秦皇はすべてこれらの八神を巡拜したのである。史記によるとこの巫祝によつて奉祀さるゝ宗教は、齊の威王宣王の頃騶衍の徒の「五徳之運」を論著することによつて理論づけられ秦帝の世に及んで齊人之を奏し、始皇之を採用したとあるから、後の世の道教、古への神仙の説がこの齊に於て大成したとみてよい。太史公もかうした信仰心の民間に有力な事情を親しく感得したから、「自此之後、方士言神祠者彌衆、然其效可睹矣」と述懐してゐる位である。

八

蓋し秦以後漢代にもなれば神仙を崇拝するもの實に益々熾んで、高祖二年には祠官をして天地四方上帝山川を祀らしめ、就中蚩尤の兵主祠が、長安に新造せられ、晋や、梁や、荆や、秦等の巫祠いづれも長安に集中して、地方の信者を率ひ、各郡國縣至る所に農耕を祈るための巫祠あらざるはなく、山東に發祥した巫教は遂に天下の公認教となつたのである。やがて漢の武帝の時代にもなると、天子親ら祠竈といふことを行ふやうになつて、黃帝や神仙を祭る外に各戸に於ても、竈神を祝福するといふ習慣が出來た。そこで武帝の如きは封禪を行ふこと數回に及び、泰山に登り、梁父に禪し、東萊を究め、八神を巡祭することが天子の尊敬を示めす所以だと考へて之を實行したものであつた。當時齊人少翁は鬼神の方を以て上に見えて死者を再現さすやうな巫術を行ひ、齊人申功や丁公或は公孫卿などの方士の、上疏して神怪奇方を語るもの萬を以て數ふるに至つた。蓋し所謂シヤーマニズムの最高發展の一時代を劃せりといふべきである。司馬遷が封禪書を史記の中にいれた理由も成程だと考へしめると同時に、古への夏國の同じ土地に、かうした宗教が起つたことを、無意味に見のがしてはならないと思ふ

九

文化の發達からみると石器から銅器、鐵器といふ風に考古學者が發達階梯をつけるのであるが、石器時代から既に宗教的要素があつて、あらゆる藝術はその根源が宗教とその儀式に基くものであるとは今更喋々するにも及ばない。従つて支那での大法たる洪範の五行や、五徳や、卜筮が祭政一

致時代の政事であつたことから商代の巫氏の勢力を回顧し、山東に發達した騶衍一派の道教を回想するとき、支那文化の起原がおぼろに理解されてきて、古代東夷の之に關係した勢力を無視することとは出来ないであらう。

かやうにして山東土着の民族は、夙に弓術に勝ぐれ、神仙を重んじ農耕にいそしむだから、周末に於て隱然たる大國であつた。秦の強暴を以て天下を統一するや二世に至り、「山東遂に諸侯を合従し、西秦人を坑し咸陽を屠つて」漢代の太平を將來した。西の力でなくて、東の力が勝つたのだ。故に司馬は曰く

「是に於て山東大に擾れ、諸侯競ひ立ち、豪俊並び立つや秦章邯をして東征せしむ、時に陳涉は滎陽細柳の子たるにすぎず、而かも遷徙の徒、才能は中人に及ばず、仲尼墨翟の賢有るに非ず、陶朱猗頓の富あるにあらず、足を行伍の間に躡み、仟陌の間に崛起し、器械の卒を率ゐ、數百の衆を將つて、轉じて秦を攻む。木をきつて兵となし、竿をかゝげて旗となす。天下雲集響應、糧をつゝみて景のごとくに從ひ山東の豪俊、遂に竝起して亡秦族せらる。

と、いかにも名文ではあるが、天下は獨り強力な武力のみでは治まらない。周の武王一たび西戎を以て東の殷を亡ぼしたが、爾來數百年春秋戰國の間をへて、一時久しく王の無かつた亂離の支那を秦は再び西戎の武力でおさへた。けれども王道を理想とし、五徳互に代はるべきことを運命と心得る山東の文化は、決して之に甘んじなかつた。その結果舊牖繩樞の賤家に生れた陳涉、一たび反をさけむで山東の諸豪竝びたち亡秦は族せられたのである。支那人はかうした歴史を熟知してたとへ西戎北狄が支那を一時的に支配はしても、結局はまた漢民族の國となる。否野蠻な胡族でも、蒙古

族でも、氏羌でも、いつのまにか支那化されてしまふと信じてゐるのであるが。さうした古今の歴史觀をなしたものは、實に司馬遷のこの秦紀の名文ではないか。さうして我等は周の統一に反對した徐淮の夷人の意氣が鬱結し遂に陳涉となつて、數百年の後に復興したものだと思ふを得ないのではないか。

一〇

山東の夷族だと考へられた土地に、最後まで弓術に秀でた羿の子孫がゐる陳涉の武力とはなつたが、一面には周に仕へた呂尙もゐた。ヒルト氏は逸周書に武王が紂を撃つた劍、諸刃の鐔形の直刀を輕呂とあるのをみて、輕呂は土耳其語の *King-Juk* キンラクである。紀元前十二世紀にキンラクといふトルコ語の兩刃の劍があつた、恐らく匈奴から得た劍であらうと述べられたのであるが、いかに面白いことで、果して然らば周は後の世の元と同じく塞外の武力で支那を亡ぼしたのであつたとみてよい。但し諸刃の劍を輕呂といふ語は、土耳其語かもしれないけれども、日本でもキレモノといつて、輕呂に近いキル、キレなどの働きの詞があり、右のやうな直刀を「ツムガリの大刀」ともいふ。つむは頭の義、ガリは諸刃の鋭さである。カリ、カル、カレ、キリ、キル、キレ、皆共通であるから、武王時代の輕呂は日本では後に動詞ともなり、都牟刈の「刈」ともなつたとみられる。或は武王當時既に山東東夷の手に「刈」があつた、それを呂尙の手から武王に渡されたともみられて、必しもトルコ族からとはいへぬと思はれるがどうであらうか。

思ふにこの田氏こそ實に齊の桓公の時、陳から入つて仕へたといふ陳完に始まるが、田氏といへば實に齊の姓で、齊に入つて改姓したとある。恐らく養子などの形で齊人の田姓に株入をしたのではないか、ともかくその後田姓のものは、段々と増加し、勢力も出來田釐の時、齊景公の大夫となり、田常の時齊の相となり、田和の時、太公望の齊に代はつて、齊の侯となつた。秦が齊を亡ぼした後でも、田は名族で、漢初に田儼は齊王となり、弟に田榮、田横などの王を稱するものがあつた。この時田假、田角、田市、田間などいふ多くの一族が活躍した。漢楚の争ひに田横は其族五百餘人と海島に走つたが、漢高祖は齊の賢者多く之に附き歸らざるを恐れて、態々人を使ひて田横を呼んだ。そこで田横は歸つたが、洛陽に至り、横は始め漢王と與に南面して孤と稱す、今漢王、天子となりて横は廼ち亡虜と爲つて北面して之に事ふに忍びないといつて、恥ぢて自剄した。すると其客の從へるもの二人まで自剄した、やがて海中にあるもの五百人も亦皆耻ぢて死んだとある、談半分としても珍らしい。いかにも後世の支那人とはちがつた耻といふことが史記に高調されてゐる、恐らくこの耻といふ考、一族皆殉死するといふことなどは實に東夷としての特色ではなかつたか。しかし史記の田儼列傳にかうした記録をのこした田氏は、この時にすべて無くはならなかつた。齊の賢者たる田の一族の關中に入つたものも亦決して少くはなかつた、故に司馬遷の見た時には大抵のち金持ちは諸田だといふ工合になつてゐた。我等はこゝにも東夷一族の優秀さを教へられる。史記列傳中にも田儼、田叔、田單の三列傳があつて、中にも田單は齊の諸田の疏屬であるが、燕の樂毅が齊を攻めて七十餘城皆降つたとき、獨り莒によつて、これに對抗し、有名な火牛の計を以て燕軍をし

りぞけ、七十餘城を復したといはるゝ名將であつた。蓋し田單の莒城は實に夏禹の安邱に近い、山東海岸の一小城であつたのである。我等はこの名將によつて、更らに再び、齊に賢者多しとの言實に偽らざるを知るのである。

一一一

之を要するに山東は支那文化の故國である、殷齊は中也といふからに、山東こそ實に支那文化の母體であつて、宗教の搖籃地であり名將、賢臣、富豪の由つて起つたところであるのである。

周や秦は西方からの出身であるが、その出て來た時には既に山東に一種の文化があり、山東民族の西移といふことによつて、西戎の居た關中も開墾されるし朔北の築城も出來た、蓋し貿易交通による經濟的活動といふものも、實に山東民族の最初に着手したもので、徒らに神仙を求めて、海上に出たのみではなかつた。それといふのも、實に山東の海岸の出入が良港を供給し、夙に北は朝鮮に、東は日本に、南は吳越に相交はつて、西方とはちがつた見識を持つたからだといはなくてはならぬと同時に、山東競ひ立つて、亡秦族せられた史實を見る時、支那文化の要素として、この山東の發展、東夷の意氣を見のがしてはなるまい。寸暇を得て史記一篇を通讀し東夷について得た知識は右の如くであるが、勿論北狄にも西戎にも、南蠻にも、支那文化に寄與した人々の多いことを疑はないが、史記に記録された上代傳説では、東夷ほどのものは他の三夷にないやうである。蓋し其民族が他の三方とは異つてゐたからである。

たとへ舊石器時代の民族は中央アジアに居て、それから四方にわかれたものとしても、舊石器や新石器時代の文化は各地類似の原始文化である。支那文化として特色をもつのは、實に周漢の間に發達したものであるとするならば、何としても東夷即ち山東民族の寄與は大きい。支那の傳説で三皇五帝の都邑や神明の墳丘がすべてこの方面に集まるといふ丈でも、漢民族の文化は山東に初發したといつて過言ではないであらう。

我等はこの山東に起つた泰山天孫の傳説や、入神祠を輕視してはならないと同時に、竈を祀るといふ今の民間信仰も昔はこの山東の民俗に起るのであつたと知つてやがてさうした信仰の分布を尋ねれば、或は山東の東亞の文化に對する位置、いよ／＼明になるであらうかと考へるものである。これを以て結語とする。(完)